

## ふるさとと再訪

## 長野・飯山 ⑩

6月4日、天皇皇后両陛下が、全国植樹祭（長野市）出席のために北陸新幹線で来訪、昨春開業の飯山駅に降り立たれた。6千人の市民の歓迎で駅頭は沸いた。そこからお車で千曲川沿いを唱歌「故郷」の歌詞を作った高野辰之の記念館（中野市）へ。飯山市は駅開業以来の最大の「ハレ」の日を迎えた。

飯山市の人口は2万4千人。長野県で一番小さい市だ。北信濃の玄関として、近隣9市町村が目指す一大観光圏「信越自然郷」の導入駅として「飯山駅」への期待は大きい。長野駅から新幹線でわずか11分。大きなチャンスと見る向きも多いが、ストロー現象（高速網が整備され、地方の人口や資本が大都市に吸い寄せられること）で地盤沈下の懸念も多分にある。

1873年創業、飯山を代表する日本酒の一つ「水尾」の蔵元、田中屋酒造店の田中隆太社

編集委員 工藤憲雄(64)

## ストロー現象と闘う

長（51）は、飯山城址に近い街並み再生の活動に取り組み「広小路会議」を主宰している。長野県から「新幹線が来るので、飯山はストロー現象で落ち込むから頑張れ」と補助金がつき、市から「何かやってくれ」と依頼された。これまでもイベ

ントをいくつもやってきたが、そのとき人は来ても経済効果に繋がらず、シャッター通り現象の進行にうんざりしていた。あるとき、市の職員から美術家の田窪恭治さん(67)を紹介された。フランス・ノルマンディーの廃墟と化した小さな16世紀の礼拝堂に出会い、一家で移住、

## 夢の街芸術家と描く



「飯山らしい飯山を残したい」と語る田中隆太さん 写真 小林裕幸

10年かけ地域の人に愛される「林檎の礼拝堂」として教会を再生させた、風景芸術家である。

田中社長は会ってすぐ「ピンときた」。隣の飯綱町でもリンゴの壁画でまちづくりを手掛けている。「地域の中に入り10年かけて作品が評価された人。都会と違って地方ではものすごく時間がかかる。街の開発のデザインに絡んでもらえばきっとおもしろいものができる」

第1弾は、酒蔵の裏にある80

した。「この土地でいい酒を造って売るなんて夢のまた夢だった。お袋も杜氏も奇跡だ」とお隣のパティスリー・ヒラノは、元は両親が細々と営む城下町の和菓子屋さん。長野高専出の息子の平野信一さん(57)が一念発起、都会の洋菓子屋に修業に出て、25歳で戻り、開店した。今では25人も従業員がいる長野でも有名なケーキ&カフェに。店内の田窪さんのリンゴの壁画を見に来る人も多い。

余年の歴史の「飯山復活教会」の再生だった。寺の町の飯山ではひととき異彩を放つ存在。玄関に至る通路に赤いサビで変化していく「コルテン鋼」を敷き詰めて新しい生命を吹き込んだ。教会は街再生のシンボルだ。田中社長は、26歳の時に飯山に戻って、パーキンソン病の父に代わり後を継いだ。数々の失敗をへて20年前、野沢温泉村の水尾山の麓に湧く水を使った清酒「水尾」を出して家運が上昇「酒「水尾」を出して家運が上昇「水尾」を出して家運が上昇「水尾」を出して家運が上昇」。(この項おわり)